

8 月第 2 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 8 月 13 日（日）10：30－11：30 聖霊降臨節第 12 主日

■説 教： 保科けい子 牧師

■説教題：「目を覚まして」

■聖 書：ルカによる福音書 12 章 35～48 節（新約 p132～133）

■讃美歌：8「心の底より 神に感謝せん、」

472「朝ごとに主は目を覚まさせ、」

昨日も非常に暑い一日になりました。7 月の終わりごろから猛暑日とか酷暑日などと言われ続けて、8 月も間もなく半ばになります。少し動くと汗が流れてくるのに、私はクーラーがあまり好きではないので、早く涼しさが来ることを願いつつただらだと過ごしておりました。本日の聖書箇所ルカによる福音書 12 章 35～48 節は、日本基督教団の聖書日課には〈主の来臨に備える〉という見出しがついております。それを見ると、8 月のこの頃は暑くてだらだらしがちなので、この辺で信仰的に心機一転しましょうということなのかもしれません。

さて、本日の箇所は、ルカによる福音書 9 章 51 節から始まる、主イエスがエルサレムに向かう旅の途中での弟子たちに対する教えの一つで、たとえを用いて語られています。12 章の 1 節には、主イエスのもとに数えきれないほどの群衆が集まって来て足を踏み合うほどになった中で、主イエスはその群衆たちに対してではなく、先ずご自分の身近にいる弟子たちに向かってお語りになったと説明されています。そして、本日の箇所の直前の段落、22 節から 34 節には「思い悩むな」という見出しがついていますが、その内容については、私たちはマタイによる福音書 6 章のほうで覚えているものと重なります。その勧めの後で、主イエスは 35 節で「腰に帯を締め、ともし火をともしいなさい」とたとえで語られているのです。それは 36 節にあるように「主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい」ということです。聖書の書かれている舞台であるイスラエルでは、当時の婚宴は何日にも亘って催されていました。多くの人々が入れ代わり立ち代わりにやって来て、食べたり飲んだりしてお祝いをするのです。招待された人がいつまでいるのか、いつ帰るかは分かりません。本日の箇所ので記されているたとえの場合は、主人がそのような婚姻に招かれて出席している側から、その帰りを待っている僕たちの様子が記されています。主人の帰りは今日なのか明日なのか分からないし、真夜中なのか夜明けなのかも分からないという宙ぶらりんの状態であったのです。そのような中で、気を抜かずにきちんと衣服を整え背筋を伸ばして主人の帰りを待っている、それがこの僕たちの置かれた状況です。ここで取り上げられている「僕」とは召使いの中でも特別な存在で、後で記されているように、

下男や女中などの使用人を監督するような立場であったようです。つまり主イエスはここで、ご自分に従い仕えている弟子たちに対して、あなたがたは「僕」なのだから「僕」としての役割をしっかりと果たしなさい、と弟子としてのあり方を教えておられるのです。言い換えれば、ここに語られているのは誰にでもあてはまる一般的な倫理道德の教えではなくて、あくまでも主イエスに従っていかうとしている弟子たちに対するもの、つまり信仰者に対する教えなのです。

そのことが、41節のペトロの問いを通して示されています。ペトロは主イエスの語られたたとえを聞いて、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と問いかけました。この箇所については、いくつかの読み方があると言われていますが、「わたしたち」はペトロを含めた弟子たちのことであり「みんな」は周囲にいる群衆たちのこと、というのが最も一般的な読み方です。そのように考えれば、42節以下で主人が召し使いたちの上に立てる管理人について、主イエスが詳しく語っておられることとつながるとも考えられるのです。そして、私たちプロテスタント教会に属している者にとっては、この「管理人」は弟子たちの中の特定の人々のことではなく、主イエスの弟子である私たちすべての者がここで語られている「管理人」である、と受け止めることができるのです。そういうわけで、主イエスご自身から管理の務めをしっかりと果たすことを求められている、と考えたいと思います。いずれにせよ、主イエスの弟子たち、言い換えれば主イエス・キリストを信じる者のあり方が教えられているということになります。

40節に、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」とあります。「人の子」とは、主イエスがご自身のことを語られるときに特別に用いられる言葉です。人の子、すなわち主イエスが思いがけない時に来る、そのことは、この時の弟子たちだけに語られたと言うよりも、主イエスの十字架の死と復活と昇天とを経て誕生する教会に属する人々に対して語られたものであるということが出来ます。それはまた、今の教会に集う私たちに対しても語られていると考えられるのではないのでしょうか。主イエス・キリストは十字架にかけられて死に、三日目に復活なさいました。そして四十日に亘って弟子たちに生きておられる姿を現し、そして弟子たちの見ている前で天に上げられました。しかし、天に昇られた主イエスはいつかもう一度この世に来られるのです。それを「再臨」あるいは「来臨」と言います。再臨の時には、主イエスはまことの神としての栄光を帯びて来られ、全ての者を審くいわゆる最後の審判が主イエスによってなされます。それによって今のこの世は終わり、神の国が完成します。ですからそれは、主イエスを信じる信仰者にとっては救いの完成の時です。主イエスの再臨を待つことは教会の信仰の一つの中心です。「人の子が来る」というのはこの再臨を意味しています。しかし、それがいつなのか私たちには分かりません。再臨の時期は神

様がお決めになることであって、人間には知ることが許されていないのです。そこに、「再臨のメシアは私である」と叫ぶ教祖が出現して、人々を不安に陥れて声かけをする新興宗教が入り込んでくる隙間が生まれてしまうのだと思います。だからこそ、「本当の主人の帰りを用意して待っている」という緊張感を持って生きることが大切だと勧められているのです。そのことを主イエスは、37 節では「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」と語り、38 節でも「主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。」と繰り返して語っておられるのです。

しかし私たちは、いつでも目を覚まして緊張感をもって主イエスの再臨を待ち望むという生き方ができるかと問われれば、到底できません。それなのに、ルカによる福音書は 21 章 36 節でもう一度「しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」と念を押して、目を覚ましていることを厳しく勧めるのです。そのことを思うとき、私はいつでもルカによる福音書の著者が記している主イエスのある言葉を思い出します。22 章 32 節です。「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」とあります。オリーブ山で、「誘惑に陥らないように祈りなさい」との主イエスの言葉がけがあったにもかかわらず、わずかな間も目を覚まして祈っていることができなかつたシモン・ペトロや弟子たちの弱さに、私たちすべてのものの弱さを重ねて見通し、そのような者たちのために祈ってくださるという主イエスの恵みを、そこに見ることができます。あなた方は「いつも目を覚まして祈」ることができるはずだ、と励ましてくださる主イエスの御言葉を、私たちも今こそ聴きたいと思います。